附加記録(1)から考えて 23 日観察した群は、本州を南下して来て下関市 霊鷲山附近より関門海峡を渡り門司市砂利山を経て風師山一戸ノ上山一足立山と山伝いに南下していったものと思われる。

さて、ハチクマは毎年このように群れて渡るものなのか、あるいは今年だけ何か特別の状況により群れたものなのか明らかでないが、筆者はおそらく前者であろうと思う。また毎年前記のようなコースを渡っているか否かは今後注意したい。

Migration of *Pernis apivorus* observed in northern Kiushiu (Nishida, Satoshi)

The flock-migration of birds of prey has only been known in *Butastur* in Japan. But the writer observed about 1,500 Japanese Honey Buzzards migrating over Mt. Adachi in Kokura City on September 23, 1961. On the same day 50 migrating birds were observed over Moji by Mr. Takahashi, and on October 15 the writer also observed 11 at Saganoseki, Ōita Prefecture. These observations suggest its migratory route figured in Fig. 1.

オーストンヤマガラ の 気 候 に よ る 換 羽 後 の 羽 色 変 化 小 島 哲 朗

緒 言

一昨年 (1960) 10 日友人から一羽のオーストンヤマガラを譲り受け、その後一年あまり、東京において飼育した結果、亜種の気候的条件と羽色との関係に興味ある問題を認めたので、それについて報告する。

測定及び羽色、測定 嘴峰 13.5 翼長 85 尾長 54 跗蹠 20(mm)

オーストンヤマガラを手にとって見たのは、はじめてのことである。稀には北海道、本州の各地で、頭および喉の黒色部が灰色を帯び、頬、額、耳羽のクリーム色の部分が栗色化したものが捕獲されている。それは愛染ヤマガラ或は、弁慶ヤマカラと呼ばれていた。このオーストンヤマガラは弁慶ヤマガラと同じく頭及び喉の黒色部が背と同じオリーブ灰色をおびていた。しかし上記測定の結果でもオーストンヤマガラであることは明らかである。

飼 育 経 過

この個体は極めて温順な性格で、中型の竹籠 (所謂尺 2 寸籠) に入れたが尾羽を折ることもなく、よく筆者になついた、餌はとりあえず麻の実を給し、ブドウスカシバの幼虫 (エビツル虫)、クロスジキンノメイガの幼虫 (袋虫)、ゴミムシダマシの幼虫 (ミールオーム) などを一日数匹あたえた、秋を過ぎ厳寒の季節になっても室内で極めて健康を保ち、無事越冬した。

地鳴のツツビー・ツツビーも山雀に比べて太い、衆知のようにヤマガラは麻の実を好

むがこれのみでは健康を保つことは困難であるので、3月に入ってすり餌につけた、すり餌は所謂五分餌にユズ玉子の黄味1個の10分の1ほどを毎日すり込んであたえた。4月に入りいよいよ発情期を迎えたが、ついに囀ることなく、♀であると認定した。

9月10日頃から順調に換羽にはいり、ほど1ヶ月で完了したが、この姿がヤマガラとまったく同色になった、即ち顔面の腹部と同じ栗色の部分はすべてクリーム色となり腹部の栗色も中央はクリーム色をおび背のオリーブ灰色が灰青色となり、さらに頭部のオリーブ灰色が純黒色となったことである。なお測定は換羽前と同一であった。

結 び

唯一回の飼育結果で決定的確信というのは早計であるが、この結果からしてオーストンヤマガラは遺伝変異による地理的品種ではなく、気候的な地方形であると考えられる。山階氏の樺太産のアカゲラを本州で飼育したところ、換羽後本州産の亜種の如く下面が濃色となった実験の逆例と云える。今後の研究課題として、ヤマガラを三宅島、或は八丈島にて飼育し、換羽の結果を見ること、また気候的色彩の顕著な啄木類を好例として光線、温度、湿度などの処理によって羽色、色素、成長などの実質を検討するなど興味のあることで、雑多な亜種の内容を整理する手段の一助となろう。

附 記 現在オーストンヤマガラ(採集地三宅島)♂♀それぞれ一羽と、前記の弁慶ヤマガラ(♀?)を飼育しており、この報告の再確認の実験をしている。

なおこの♀が先に飼育した♀とまったく同色で、頭及び喉の黒色部が強く灰青色をおび、ほとんど背と同色である。

わづか2個体をもって断ずることはできないが、次のようなことが考えられるので御教示願いたい。

1. ヤマガラの濃色型のなかにこの型が♀ともに出現するのか。
2. それは濃色化する過程になんらかの原因から黒色部が変色するのか(弁慶ヤマガラとも関連して考えられる)。
3. ♀にのみ現れる変異か。
4. 幼鳥の時期のみか、即ち第二回の換羽に黒色となるのか。

An example of plumage colour change after moult by climatic displacement in a Varied Tit (Kojima, Testuro)

A female Owstons' Varied Tit *Parus varius owstoni*, a dark race of Seven Is. of Izu had been kept by the author in Tokyo from October. In next September this bird moulted its plumage and acquired an entirely different colour which was almost exactly copious to the mainland race *P. v. varius*.

The racial colour pattern in this species is therefore entirely climatic (though based only on an example). The measurements remained unchanged.